

〔様式 11〕

（対象事業：平成 17 年度「芸術拠点形成事業（展覧会事業等支援）」）

事業名：「中国－黄金時代の夜明け China : Dawn of a Golden Age」

事業者名：MIHO MUSEUM

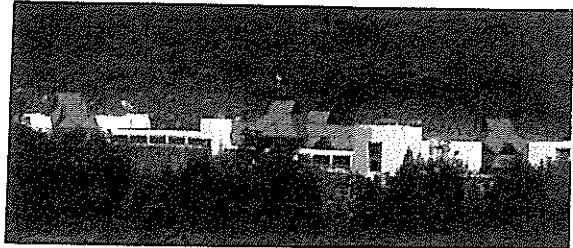
連携事業館名：アメリカ ニューヨーク・メトロポリタン美術館

住所：滋賀県甲賀市信楽町桃谷 300

TEL：0748-82-3411

FAX：0748-82-3414

HPアドレス：<http://miho.jp>



① 施設概要

敷地面積：100万㎡（30万坪）

美術館棟（床面積）：17,400㎡

レセプション棟（床面積）：3,400㎡

②事業の意図目的

古代より日本と中国の文化交流は活発に行われていたが、近年、日本において中国文化への関心が高まり、華やかであった後漢から盛唐時代の美術品を通して更なる文化交流の発展を図る。

③事業概要

本事業は、今年度、MIHO MUSEUMにおいて行われる秋季特別展「中国－美の十字路」展に伴い、中国における国際文化の黄金時代－大唐文明へと至る後漢以後の時代における多民族、多文化の交錯した激動の時代を、専門家であるメトロポリタン美術館アジア美術部門の James C. Y. Watt 博士より分かりやすく講演して頂き、多文化理解の促進を図る目的で行う事業である。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 案内状 1,000 部

作成した報告書等

冊子（50部 作成）

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 103 名

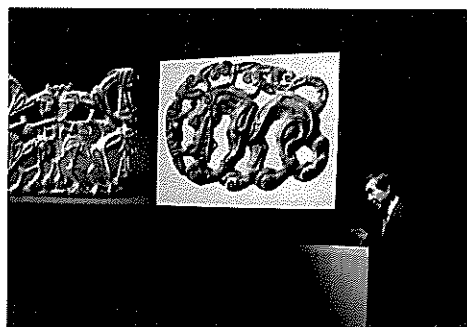
内 訳 大人 99 名（内、海外の方 6 名） 子ども 4 名

### (1) 事業の実施状況について

本事業は、当館で開催した秋季特別展「中国—美の十字路展」を企画されたアメリカ・ニューヨーク・メトロポリタン美術館アジア美術部門部長である、ジェームズC. Y. ワット博士を招聘する形で実施した。この展覧会は、出品数の約6割以上が一級文物であり、後にも先にもこのような大規模な中国展はおそらく有り得ないのではなかろうか。この展覧会は、ワット博士が10年間を費やして調査研究された集大成であり、メトロポリタン美術館という世界的な美術館をバックにしているからこそ可能となったと思われる。また、メトロポリタン美術館では、アメリカ大陸に上陸した最大の中国展という広報活動が行なわれた。この企画展は、当初メトロポリタン美術館だけで終了する予定であった。しかし、中国政府側の意向により中国の香港と日本では東京の森美術館、滋賀のMIHO MUSEUM（当館）、福岡の九州国立博物館、宮城の東北歴史博物館を巡回することになった。ワット博士が企画され集められた展示であったが、メトロポリタン美術館を離れた後、展示構成が変わりメトロポリタン美術館と中国、日本との関係に暗雲が立ち始めていた。当館とメトロポリタン美術館のワット博士とは、当館の準備段階から設計にアドバイスを頂いており良好な関係を保っていたが、講演会の依頼に最初は難色を示された。しかし、この講演会事業を文化庁芸術拠点形成事業として開催する予定であることを連絡し、再度交渉に当たり了承を得ることに成功した。今回初めての申請であったが、文化庁の事業であることの重さを改めて実感した。

ワット博士との交渉は、今回の秋季特別展「中国—美の十字路展」を担当した稲垣肇研究主任が行なった。また、今回の特別展に日本航空が協力として入って頂いていた関係からワット博士招聘に伴う航空運賃の特別のご配慮を頂いた。様々な人の協力を頂いて事業が形作られていった。

このワット博士の講演会を広く専門家に伝えるために、関西・中部地方の大学・大学院の中国研究家へおよそ700通の案内状を送付した。講演会場は100名ほどの収容人数であるが、今までの講演会事業の実績を考え、あえて申し込みを取らず先着順に入って頂く方針で進めることにした。また、講演会の日が日曜日と言うこともあり、当日来られたお客様に対する告知を積極的に行なうよう各署に促した。特別展のポスターやチラシ、ホームページなどにこの事業の掲載を行なった効果によるものかは定かではないが、電話による問い合わせが何件か寄せられた。



スライドを見ながら解説をされるワット博士

ワット博士が来日され講演会の打合せを行なったが、講演会で使用する画像がスライドであった為、投影機のファンの音が大きくなり聴衆者から苦情が出ないかが心配であ

った。幸いにも、同時通訳の為に聴衆の大半を占める日本人はイヤホンを付けることにより、さほど外部の音を気にすることなく講演に集中出来る事が分かった。日本国内では、画像をデーターとして持ち歩くことが主流だと思われるが、海外ではまだまだスライドが活用されていることを知り、ファンの音をどのように対処していくかが今後の課題となった。

当館の講演会は通常 100 名ほどの収容に対して 5 割行けば良い方であるが、この講演会事業は満席に近い状態となり盛況であった。関係者一同驚きであったが、一致団結してお客様をお迎えさせて頂いたことが実を結んだのではないかと思う。今後の講演会事業もこのように取り組めるよう、良い事例が出来たことに感謝したい。

## （２）地域との連携について

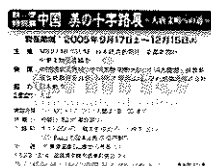
この事業の趣旨として世界を地域として捉えているが、実際の地元と言うべき地域への広報を進めていくことを考えた。それは、水滴が水に落ちると同心円状に波が広がって行くのと同じように、広報活動も地元を中心として行なうことによって、広がりを見せてくれるのではないかと思われたからである。広報手段として効果があると思われる案内状を送付することに決め、さらに、特別展のポスター及びチラシにこの講演会事業を掲載することが出来た。また、ホームページの日本語版への掲載を行なった。ポスター及びチラシ、ホームページの掲載はデザインの制約もあり目立つものとは言えなかったが、多少なりとも効果があったのではないかと思われる。

学術講演会と言え、とにかく難しいものと捉われてしまいがちである。やはり、興味を持たれるのは専門家であり、そこに焦点を当てるのがこの事業を成功させる鍵になると考えた。まず、インターネットで関西地方の大学のホームページから中国に関する研究を行なっている研究者を調べ、リストを制作した。当館は関西地方に属しているが、三重県に近いので中部地方からもお客様が多く訪れる。このことを考え、発送の範囲を中部地方まで広げることにした。地元といえども、当館の存在を知らない方が多くいらっしゃるの、案内状を出すことはこの展覧会及び講演会のことを認知してもらうことは研究者にとっても、有益なことではなかったのではないか。それを示す事柄として、美の十字路展の来館者の多くが大学の教授や学生であったことである。

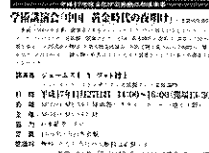
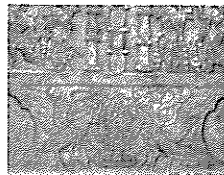
また、もう一つの広報対象者として考えられたのが、ここ数年、毎年夏に行なわれている滋賀県を中心とした美術館・博物館関係者と教職員との研修会に参加された方である。特に教職員は小学校の先生が中心に参加されているが、美術館教育にとっても熱心な方ばかり集まっておられるので、この方々に展示の意図を深く知って頂くことで今後の連携授業を進める上において先生が中心となってプログラムを開発して頂ける可能性を引き出そうとする意図があった。研修会を毎年重ねていくようになり、先生方が自発的になってきた。初めの頃は、お互いの意見が食い違うこともしばしばであったが、顔と名前が一致してくるようになると、協力しあう気持ちがお互いに沸いてきた。改めて思うことは、やはり地元があつての美術館・博物館であり、そこに属する学校との協力関係は欠かせないものであると痛感した。

### (3) 成果物について

- 案内状を 1,000 部外注し作成した。発送先として東アジアを研究されている関西・中部地方の大学関係者に 528 部、当館が主催している夏季教員研修会にご参加頂いている方に 154 部、残り 317 部を当館エントランスへ置き来館者に配布した。

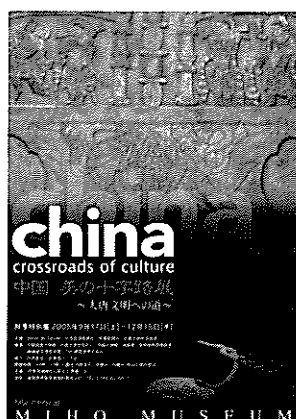


案内状 (表)



案内状 (裏)

- 秋季特別展「中国—美の十字路展」の B1 ポスター 43 枚・B2 ポスター 2,400 枚・B3 ポスター 1,550 枚・A4 チラシ 117,000 部に当事業を記載した。



A4 チラシ (表)



A4 チラシ (裏)

- 当館ホームページに当事業を記載した。
- 講演会ポスターは外注せず、当館で作成し 1 ヶ月前よりエントランスに掲示した。また、講演会当日の誘導看板も当館で作成し、3 箇所に設置した。
- 今後の課題として案内状を発送するタイミングを今一度考え直し、より効果的なデザインや時期を検討していく必要がある。また、専門家だけではなくより多くの方々に美術品に親しんでいただけるような工夫が必要だと思われた。

### (4) 参加者の反応

館内放送を流したことによるものか、講演会が始まる 10 分前位から人が集り出し、5 分前位にはほぼ満席の状態になった。皆、この講演を楽しみにされていたのか、躊躇することなく会場内に入っていかれた。同時通訳用の機械をお渡ししたが、その使用方はなるべく一人一人に説明するように心掛けた。その甲斐あってか、機械に対しての苦情は殆どなかった。

また、聴衆者は専門家が多かったためか、会場はとても落ち着いた雰囲気の中で講演

が始まった。ワット氏の講演が始まると、皆一様に熱心に聞き入っておられた。椅子に備え付けられたテーブルを出し、講演内容を書き取る方があちらこちらで見受けられた。また、ワット氏の話はとてもテンポが良く、スライドを巧みに使い聴衆を飽きさせることがなかった。このような人を引き込む力が、一級文物6割以上と言う驚異的な展覧会へと繋がっていったのだと改めて痛感した。

最後に質疑応答の時間を設けていたが、殆ど言い尽くされてしまったのか、日本人特有の内気な性格によるものかは分からないが、思っていた以上には質問が出なかったのが残念である。講演会が終了するまで席を立たれる方も無く、またこれと言ったトラブルも無く、無事に終了することが出来たことは何よりも変えがたいものであった。



会場入口にて同時通訳機を受け取られるお客様



講演会終了時の会場

#### (5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

この講演会事業を実施したことにより、特別展「美の十字路展」とメトロポリタン美術館との関係が明確に示すことが出来た。巡回展であることにより、それぞれの館の特徴を出すことに制限があったが、企画者であるワット博士に当館で講演をして頂く事により、薄らいでいた企画の意図を明確にすることが出来た。また、関西・中部の大学の中国研究者に拝聴して頂けたことにより、今後の研究がより密度の高いものになることを期待するものとなった。さらに、小学校の教育関係者にとっても得られたものは大きかったのではなかろうか。それは、先生方は普段の業務に追われてしまい専門的な知識を得る機会を見つけることが難しいと思われるからである。美術館は情報を発信する場所であり、どのような立場の人にとっても満足を得るだけの情報を持たなければならない場所であると思う。その命題こそが調査研究活動の発露ではなかろうか。

この事業の成功により、当館とメトロポリタン美術館は今まで以上に強い絆を構築することが出来た。そのことの証しとして、今度はメトロポリタン美術館ギリシャ・ローマ部門部長の講演が決定した。世界の三大美術館の一つと言われているメトロポリタン美術館の部長から続けて講演を頂けることはとても光栄なことである。この関係を今後どのように発展させていくかを考えなければならない時期に来ている。丁度、当館は来年の秋に開館10周年を迎える。世界がグローバル化している今日、美術館・博物館は率先して、その推進役を努めていかなければならないのではなかろうか。芸術は、いとも簡単に国境を越えて行って他の地域の人々に少なからずの影響を及ぼす。このことは、芸術が世界をまとめていく鍵になるということである。多くの美術品が平和や祈りを題材に作り上げられてきたが、その作者の思いを一人でも多くの方々に感じとって頂く事が

美術館・博物館にとっての一つの使命ではないのではなかろうか。先人の文化を知り、新たな文化を作り出す。その最先端の情報発信基地としての役割を我々は果たしていきたい。



特別展第一会場前にて（ワット博士）